

“コロナのある生活”を 心豊かに生きるヒント

入賞・入選者25名

応募総数 1,760編

【主催】

公益社団法人「小さな親切」運動本部

【後援】

日本郵便(株) 読売新聞社

入賞

- 北海道 牛田 克彦 (79)
- 栃木県 豊田 佳月 (18)
- 栃木県 中村 実千代 (67)
- 千葉県 中嶋 美衣南 (16)
- 東京都 田中 信之 (64)
- 東京都 中村 康亮 (20)
- 東京都 六ツ崎 千亜紀 (48)
- 神奈川県 能勢 薫 (56)
- 新潟県 相馬 晃 (90)
- 静岡県 渡辺 一郎 (55)
- 三重県 岩谷 隆司 (79)
- 京都府 石田 青葉 (13)
- 大阪府 中尾 れい子 (48)
- 兵庫県 魚谷 佳代子 (80)
- 兵庫県 西田 啓子 (69)
- 和歌山県 長尾 賢治 (24)
- 徳島県 天竹 勉 (65)
- 徳島県 中野 理沙 (22)
- 大分県 金谷 祥枝 (51)
- 鹿児島県 松田 幸子 (39)

大賞

- 「水の味」
滋賀県 筒井 加寿子 (64)

日本郵便賞

- 「秘密の花園」
千葉県 焼山 美羽 (17)

読売新聞社賞

- 「学んだ知識をコロナ禍で活かす」
埼玉県 山極 尊子 (40)

審査員特別賞

- 「優しい裏のおじいちゃん」
神奈川県 後藤 いづみ (54)

フレンドシップ賞

- 「独りぼっちにしない」
愛知県 目加田 朋美 (35)

身近にいる人へ「ありがとう」

突然始まったリモートワークやオンライン授業。新しい生活様式に戸惑うことの多い毎日ですが、お互いを気遣い、支え合う家族やパートナーに、改めて感謝の気持ちを伝える作品が多く寄せられました。特に、家にいる時間が増えたことで、食事の支度、掃除・洗濯など日々の家事をしてもらっている妻・母親の大ききを実感した方が多かったようです。

また、何かと不安な状況の中で、家族とのちょっとした会話で気が晴れたり、健康でいてくれるだけありがたいと感じるなど、「コロナのある生活」は、家族やパートナーとの関係を深く見つめるきっかけになったようです。

感謝の気持ちを「恥ずかしくて口にできない」と書いている方がちらほらいらっしゃいましたが、ぜひ「いつもありがとう」と、言葉にして伝えてほしいなあと思います。きっと、身近な方との心の距離がぐっと近づくのではないのでしょうか。

「温かな言葉」の大切さ

一方で、感染への恐怖や終息の見えない状況に、不安や焦りを感じている様子もたくさん綴られていました。学校に行けず、思うように勉強や部活ができない不安から、家族にあたってしまったり、友人とのけんかが増えた、という学生さん。新しい生活様式に慣れず、抑うつ状態になってしまったという方

も。「コロナ差別」や「自粛警察」など、新たな社会問題に、殺伐とした気持ちになった方も多かったようです。

しかし、そんな曇った心を、晴れやかにしてくれたのは、やはり、人との触れ合い。特に、友人や職場、近所の方の前向きな態度や、「温かな言葉」に助けられたというエピソードがいくつ寄せられました。

「戦時中もみんなで支え合い、生き抜いてこられたんだから大丈夫」と筆者を励ます、訪問看護先の90歳のご婦人。忙しい朝、やっとの思いでぐずる子どもたちに準備をさせたのに、マスクを着け忘れて家を出てしまい、イライラしていた筆者に、「大変だけど、子育てがんばってね」と、さっとマスクを渡してくれたご近所さん。時節柄、面会が制限され孤独な入院生活の中、明るいあいさつや気遣いで、心を慰めてくれた医療従事者や病院スタッフ。

不安な状況にあるからこそ、「おつかれさま」「大丈夫だよ」「無理しないでね」など、なにげない一言が深く心に響く。親しい関係ではなくても、あいさつをしたり、声をかけ合うことの大切さをみなさん改めて感じたようです。

コロナ禍の「楽しみ」

旅行や帰省、会食などが気軽にできなくなり、日常の楽しみが奪われる一方、新しく何かを始め、そこに楽しみを見出した方もいました。

“コロナのある生活”を 心豊かに生きるヒント



[大賞]

水の味

滋賀県

筒井 加寿子

(64)

「画像をご覧になってお判りかと思いますが、私の経験から言って、十中八九大腸癌です」

「あー、これ、判ります？ 乳癌です」

最近身体の調子がどうもすっきりしない。

そう思って病院へ行ったら、癌告知を受けた。しかも、ダブルで。

あまりの展開に、自分のことではないような気がして、私はぼーっとドクターの口元を見ていた。

一旦帰宅しようとして、バス停へ。

誰もいないと思ったら、高齢のご婦人が一人座っていた。

「こんにちは」

「あ、こんにちは」

「暑いですねえ」

「…ええ…本当に。」

答えながら、正直私は一人にしておいてほしいと思っていた。

「あの…」

「？」



「こう暑いと年寄りには水分補給が大事だから。その自販機でお水を買ったのはいいんですけど、間違えて2つ買っちゃって。あの、お嫌でなかったら、持って帰るのも重いから、飲んでいただけませんか？」

「え？…あ、じゃあ、お代を」

「そんなの、いいの。私が間違えたんですから」ペットボトルを渡される。

冷たい水を飲むと、なんだか落ち着き、現実世界に戻ってきた気がした。

「あ、これどうぞ」

ティッシュを渡される。

(???)

気が付けば、私は知らないうちに涙を流していたのだった。

「あ、やだ。…すみません！」

「病院はねえ、色々ある場所だから…」

あの時の水の味を時々思い出す。

あのご婦人は全てを判っていたのかもしれないと。

せんか。

制限のある生活はまだしばらく続きそうですが、少し勇気を出して、自分から「ありがとう」と伝えたり、温かな言葉をかけてみませんか。

日常の中に楽しみを見つけ、感謝や思いやりを忘れず前向きに生活すること。それが、コロナ禍を心豊かに生き抜くコツだといえそうです。

今年度の応募作品からは、コロナ禍によって、これまでのライフスタイルや価値観を見直し、家族など身近な人の存在の大きさ、ちょっとした気遣いや心配りの大切さに改めて気づいた方がたくさんいたことがわかりました。

* * * * *

また、オンライン化が急速に進んだことにより、妊娠・出産を経ても勉強を続けることができたという社会人大学院生もいました。在宅で勉強や仕事ができるようになったことで、出産や育児でキャリアを中断する女性が減ることは喜ばしい限りです。働き方や学び方の選択肢が増えたことは、コロナ禍の最大の恩恵といえるかもしれません。

また、オンライン化が急速に進んだことにより、妊娠・出産を経ても勉強を続けることができたという社会人大学院生もいました。在宅で勉強や仕事ができるようになったことで、出産や育児でキャリアを中断する女性が減ることは喜ばしい限りです。働き方や学び方の選択肢が増えたことは、コロナ禍の最大の恩恵といえるかもしれません。

また、オンライン化が急速に進んだことにより、妊娠・出産を経ても勉強を続けることができたという社会人大学院生もいました。在宅で勉強や仕事ができるようになったことで、出産や育児でキャリアを中断する女性が減ることは喜ばしい限りです。働き方や学び方の選択肢が増えたことは、コロナ禍の最大の恩恵といえるかもしれません。

誰かの役に立ちたいと学び始めた手話を忘れないよう、声を出せない場所では手話で会話を楽しむ親子。コロナ太り解消のため友人とダイエットを始め、ジョギングや筋トレをする際はビデオ通話で励まし合う女子学生。日常生活を4コマ漫画にしてSNSに投稿し、新たな友達をつくった人…など、楽しみ方は様々。